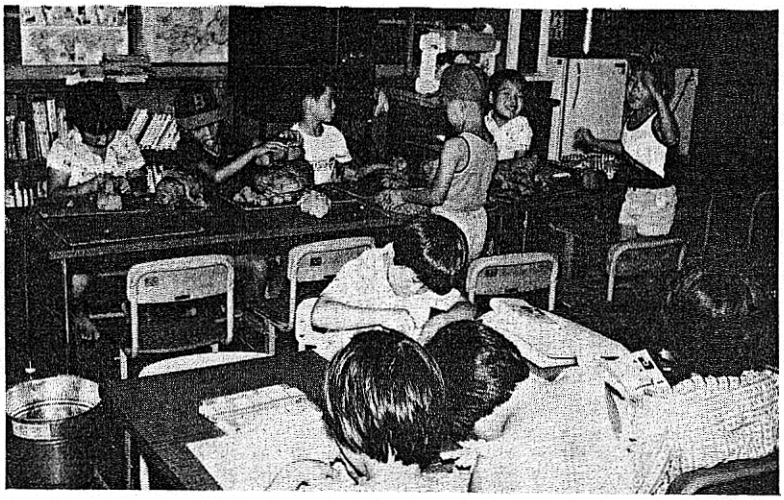
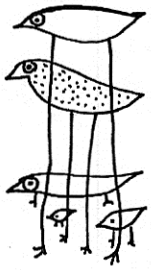
福岡
福祉活動専門員の
まなこ
社協活動前進のために

No. 7　昭和52年7月発行　福岡県専門員連絡会　まなこ編集委員会　印刷 福岡コロニー


楽しいネンド遊びの時間

問直そう 学童保育



◇核家族、共稼ぎ家庭が増える中で、共稼ぎの傾向が最も著しい大川市のカギッ子に対する福祉対策として学童保育所を紹介しよう。

◆カギッ子はどのくらいいるのだろう。市内六校区の児童の中に占める割合は20%～30%で千三百四十人にものぼる。これらの子ども達は、学校がおわったあと、親の目がとどかないところで何をやっているのだろうか。千三百四十人のカギッ子のうち、一年から三年までの低学年を対象に約百人の児童を慰み程度に預かり、保育しているのが学童保育所の現状である。

◇学童保育所は、若津ひかり園、榎津ひかり園、中原太陽の家の3ケ所がある。一番古い保育所は昭和44年1月にできた若津ひかり園である。これは、当時市内の小学校教師で組織する幼年教育部会がカギッ子問題に取り組んだ時、父母らの強い要望と一致してできたもの。

◇子ども達は学校がおわると、宿題を中心とした学習指導を受け、そのあとは思い思いに自由に遊ぶ。遊び場があって遊具、図書もそろっており子ども達は喜ろこんでいる。しかし、「ここしかおるとこなかもん」とも言っている。親の気持はどうだろう。もちろん交通事故の心配が少なく、宿題の世話をしてもらい、のびのびと遊ぶ子どもを見て「安心して働くことができる」と感謝の気持があろう。が、中には無理解な親もいる。「宿題せんならなんのためにあずけとるかわからん」「勉強せんならいかんちゃよか」……保育所を塾と感ちがいしている。先生は反発する。「学童保育所は生活指導の場なんです。非行や、交通事故を防ぎ子どもが伸び伸びと遊び、育ってくれればいいんです。どうして低学年の子どもに勉強を要求するんでしょう」

◆高学年のカギッ子対策として児童館設立の声も高まっている。運動神経のいい者ばかりが教師の指導をうけて野球やサッカーを楽しんでいる。落ちこぼれ（？）はどうするの。

◇学童保育所を全校区に、といった声や児童館設立がある中で、民間社協としての取り組みを深めていくとともに現在の子どもの養育に対する危機を感ずる親や教師の努力を期待したい。

（大川市社協　永田）

◇　◇　◇　◇

方舟に誰を乗せる？

外は春雨に煙っている。三日前に抜いた虫歯のあとがチクリと痛む。この虫歯の痛みというやつは、「市町村社協の法制化」や「ボランティア活動の推進」と、実は私の中では同じくらい大きな問題なのだ。

ところで、こうした「虫」たちとのつき合いも意外に長く深い。ちなみに、泣き虫、弱虫、腹の虫、カンの虫にふさぎの虫、数えあげればキリがないが、最近は浮気の虫まで居つきそうな気配だ。

もっとも、これらの虫たち比較的おとなしい性質のようで、まさに恥の文化の中で棲息しているわけである。

真剣なまなざしのひととき

さて、筑豊ブロック（京築を含む）の専門員連絡会が発足したのは、昭和四十八年、今から四年前の七月である。発足の動機を当時の事績が次のように伝えている。「現在、県社協で開催されている福祉活動専門員連絡会議にて、各市町村社協からブロック別の会議をもつべきであるという提案がなされている。また、すでに県南地区においては開催され、かなりの効果があることが実証された。筑豊地区においても、早急にこれを開催すべきであるという意見が山田市、稲築町より出されている。このような中で地理的、交通的中心に位置する飯塚市が、その発端を切ることが要望された。

言い出しっぺは稲築、山田、飯塚あたりのようで、今日まで頑張り続けているのは残念ながら稲築の内田専門員だけ。

この集まりも、最初は全く自主的な会合で、これが「公認」されたのはその年の十一月。会則がつくられ、会長・事務局長会議と併せ、隔月第三金曜日に会場持ち回りでスタートすることが決められた。

それからというもの雨風、艱難辛苦を乗り越えて、よくもまあ、性懲りもなく続けてきたものだとなかば呆れる。

しかし、まさにこの会議が続けられたのはブロック内各社協会長のあたたかいご理解があったからこそであることを明記しておきたい。

（筑豊・京築ブロック専門員連絡会の昨日・今日・明日）

活動（話題）の密度は別にして議題だけは豊富である。

一、地域福祉活動の課題
一、社会福祉大会のもち方
一、「市区町村社協活動強化要項」の具体的推進方策
一、広報活動のすすめ方
一、調査活動のすすめ方
一、住民座談会（話し合い）の持ち方
一、社協と民協のかかわりについて
一、ボランティア活動推進方策
一、市町村社協法制化問題
一、老人福祉活動への取り組み方策
一、事業計画のたて方
一、研修会のもち方
一、部会、委員会活動のすすめ
一、"社協の問題点"とは何か
一、住民との接点をどうつくるか

以上のテーマをくり返し論議してきた。

さらに、五十年の五月からはマンネリ化をふせぎ、個々の主体的なかかわりを追求しあう意味から提案形式をとりいれ、「今からこうした活動をこういった方法で進めようと思うが、どうだろうか」といった討議を重ねている。

そうした会議のもち方を通じて徐々に学び合えるつながりができ事務の繁雑さの中でも、せめて首だけは出し続けたいという思いが共有されてきたのではなかろうか。固い話ばかりではない。とにかく飲むことの好きな連中が多い。それも、「白玉の歯にしみとおる秋の夜の酒はしずかに飲むべかりけり」とかいう子規のうたなど、どう想像しても似合わない人たちがなぜか多い。

こうしたムードをつくりあげた責任の大半を私はいつも内田先輩に負わすことに決めている。この人のもつ筑豊人独特の川筋気質の与える影響は大きい。なにしろ、酒嫌い、女嫌いでとおっていた私までが、酒だけは好きになり始めているのだから。

ところで、最近、このブロックの諸氏、誰が生徒か先生か、飲み屋に通う機会が増えてきている。

労働条件の劣悪さ（とくに低賃金）に関してはお互いに自信？をもっているはずだが、とにかく、三人寄ればスナックの知恵、五人でバー、八人で花のキャバレーといった調子で遊びに関してはぬかりがない。あるいは、ぬかりっぱなしだ。

どうやら「虫」を飼っているのは私だけではなさそうで、「好奇心の強い男たち」の集まりがこのブロックの一

つの特色のようだ。

この好奇心、実は社協活動には欠かせない武器のように私には思える。

国家福祉の方向に歩調を合わせ、右にも左にも（最近は真中が流行しているが）首を振りつつ、やれ「住民主体」だ、「ボランティア」だ、「コミュニティ・ケア」だとこちらの事情（土壌）などおかまいなしに叫びたてられたのではかなわない。

俺たちゃいったい、何をめざしどんな風に身体を動かすことで、からだの不自由な方、おとしよりこどもたちを運動の軸にした住民の地方自治への直接参加（市民の自立）を促してゆくことができるのかを、皆が曲がりなりにも問いたずねている。

それは、まさにくらしをたてる「しごと」であるだけに苦渋に満ちたいとなみだ。

おおぎょうな言い方はよそう。

「あそび」を通じ、お互いの「いのち」の鼓動を感じあうところから、私たちのグループづくりを始めている。

虫歯が痛くて眠れない。女性が好きで溺れもする。死んだスズメにお墓もつくる。そんな仲間を大切にしたい。そんな私で樹っていたい。

灰色の雲が重く垂れている。さあ、そろそろ方舟をつくり始めよう。

（直方市社協　高石）

＊　＊　＊　＊　＊

ボランティアの原点

近年ボランティアという言葉がよく使われるようになってきた。あるとき福祉関係者の集いの場で某氏が次のような発言をされた。ボランティアを辞典で確めたところ特殊奉仕者と訳してある。ボランティアという言葉では日本人にはナジメない。現代日本の社会では英語かオランダ語か知らないがヤタラに横文字を使いたがる。ボランティアでなく特殊奉仕者と呼称したいがそれでよいかとただされていた。

（回答省略）　ある人は町内会の役員で世話をしているからボランティアだと、又別人は社会福祉関係団体役員で無報酬だからボランティアだと意識している。このような自己流の考え方の人がいかに多くなっているか。社協役員の中にさえこのような低い意識の人がある。本物のボランティア活動家に相すまない気持になるのは当然である。真のボランティア活動者は無言で一笑に付すであろう。タダ信ずるボランティアの道を誠心誠意励行するだけだと。然し民間社会福祉の立場にある社協マンは真のボランティア活動者育成と普及に当って意識のちがいや言葉が乱用される背景を探究し正しい福祉教育をなすべきであろう。先ず自分の心に再教育を通じ、前述の状況を克服するため次の引用文を再認識し、ボランティア問題をよりよい方向にもってゆこう。

もてる者がもたない者にでない、幸せな者が不幸な者にでない、もてる者ももたない者も、幸せな者も不幸な者もともに考え、ともに学び、ともに生きることなのだと……。

（S.M）

＊　＊　＊　＊

◆福岡ブロック専門員連絡会のヒトコマ◆

雨天続きのつゆ空とは思えない快晴の太宰府町・菖蒲の花の観賞客によいつつ、福岡ブロック専門員連絡会が六月八日開催された。

地元の河島専門員、ちょうど飛入りの来客があり、会議室の出入りが激しい。汗をふきふき日永田氏の司会で昭和五二年度社協事業計画・予算を中心に活動交換を行う。会員制の実施状況とあり方（西氏）福祉バスの運営のあり方（後藤氏）等いろいろの問題が提起された。今回は九社協（法人）中四カ所が欠席し、なかなか話しがにつまらない。この福岡ブロック専門員連絡会は、五一年一月に発足し、今まで、四回開催された。今後の課題として、①定例開催日の明確化、②会場もちまわり、③問題提起者の設定等筑豊ブロック専門員連絡会の行っている方法を参考によりよい方向にいかしてほしいものである。

〈メンバー〉　A日永田（筑紫野市）、B河島（太宰府町）、C森山（春日市）、D西（篠栗町）、E藤井（前原町）、F田ノ口（須恵町）、G安東（大野城市）、H後藤（那珂川町）、石松（宗像町）

（T・Y）

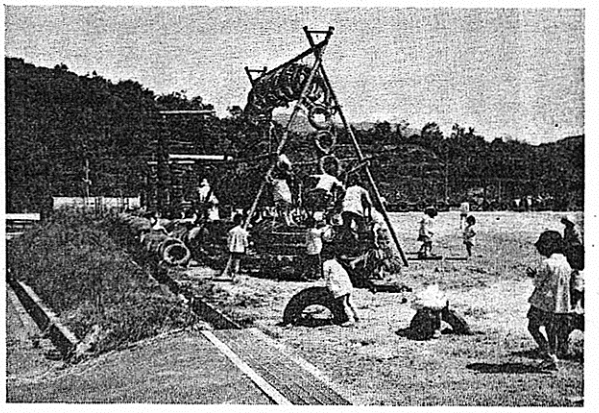
古タイヤに善意の手

福祉の広場・友愛グランドの完成

「おいちゃん、早くターザン作ってよ…　まだできんとね、早く遊びたいな」「よしよし、もうすぐ作ってやるよ」。これは社協友愛グランドでの話である。山田市社協では昨年十月市庁舎前の日赤病院建設予定地を借り受け老人や子供達が健やかに過ごしてほしいと願いをこめて福祉の広場友愛グランドを造ったのである。このように書けばいとも簡単であるが、それはそれは大変なもので先ずはグランドの整地から始めた。大人の背よりも高い「セイタカアワダチ草」や「カズラ」、人の入れそうもない繁殖ぶりである。そこでボランティアの皆さんに草刈りを呼びかけ当日は社協会長をはじめ三〇数名の方が手に手に鎌を持って集まり草刈り奉仕をしていただいた。

又ある建設会社の方と水道工事店の方からはブルドーザで奉仕していただきボランティアの方による整地など皆さんの善意で出来あがったのが社協友愛グランドである。

開場式は盛大に行ったのですが、その後の利用者が少く楽しくて健康のためになるものを作れば皆さんが集つまって来るのではなかろうかと考え、思いついたのが古タイヤを利用しての健康促進遊具、今はやりのアスレチックの様なものである。



"ワーイ" タイヤのぼりだ！

早速マスコミに古タイヤ募集の報道をしていただくと、市内はもとより市外の方より申し出があり、二日間で目標の七〇〇個を確保する事ができ、ボランティアの方四～五名と製作に取りかかりました。運んで来たタイヤを洗剤をつけて洗うのから始まり毎日毎日がタイヤとの闘いであります。ドリルでタイヤに穴をあける者、ボルトをしめる者、又、タイヤを半分に切る者等、手にはまめをつくりながら約一ケ月で五種類の遊具を完成、子供達もぽつぽつと遊びに来るようになり、子供達にどのような遊具を作ってほしいのかをきき、又子供達や老人の健康に役立つのか考えながらの製作である。そして二ケ月で十一種類を完成、最後のターザンが未完成で子供から請求されているのである。

今思えば社協はクズ屋を始めたのではないかとか、陰口を言っていたそうであるが、今グランドでは三〇～五〇人の子供達が楽しそうに自分達なりに遊具を利用していろいろ工夫しながら遊んでいる姿を見るにつけ大成功であったと思っている。見かけは悪いが誇りに思う事は会長を始めボランティアの皆さんと力を合せて素人で作りあげた事ではなかろうか、心からボランティアの皆さんに感謝する次第である。グランドに集まって来る子供達に一つ一つの遊具に名称を募集し、現在七〇通の応募があっているようである。老人の方は遊具を利用して長生きしていただきたいと思うし、未来を担う子供達は健康が第一である。食べ物にもよると思うが学校や家庭で過保護すぎるのではなかろうか。おもいっきり解放してやりコマーシャルではないが、わんぱくでもいい逞しく育ってほしいと思う昨今である。

（山田市社協　山見）

＊＊
＊＊＊＊

社協法人化五〇％越す

現在、県内で政令市を除いて、市町村数は九五カ所（市十八、町六九、村八）あります。

この三月で川崎町が社協の法人認可をとり、法人社協数は四八カ所（市十八、町二九、村一）となり、法人化率が五〇％を越えました。

これは昭和四二年に二〇カ所に満たなかったのを考えると約二・五倍、とりわけ、昭和四六年に三〇カ所を越してから、急速に増加しています。

しかし、法人化が即、社協活動の前進につながらないのが社協の悩み、財源問題からくる人的確保の悩みは、全国的に大きいようだ。これは、常に問われつつも、少しもいい方向に進んでないように思う。定着なきニードに会して、社協（民間福祉）はどこをゆく……。

（T・Y）

新旧交替

喜びも、悲しみも、民間福祉の地震計は大波？小波？　五一年度末、専門員の新旧交替社協三カ所。感謝と期待の中で……。

■山田市　大塚　弘氏（退職）
　　山見　嘉昭氏（新規）
■瀬高町　本元　正氏（退職）
　　田中　義男氏（新規）
■黒木町　浅田　高輝氏（退職）
　　木下　通氏（新規）

献血事業からの前進

〔福祉活動の組織化をめざす〕

◇◇ 昭和46年10月、社協事務局が行政の兼務から独立の機会に縁あって社協入りした。早や5年有半を過ぎてしまったわけです。当時をふりかえって考えてみますと、「社協」の存在は勿論その名称さえも知らなかったわけです。

したがって、何をしたらよいのやら全く見当もつかず途方に暮れていたことを思い出します。

◇◇ その後東京での社協中央研修を初め各種の研修会に出席し、先輩諸氏の指導助言を得た。どうやら一応の体面をつくろって来たというのが私であり、本市社協の姿であります。

ただ、今迄の体験で何が一番身についたかと言いますと、昼の研修ではなく（居眠りが多いから）夜の研修の効果がきわめて高かったことを素直に告白します。

◇◇ 今迄の研修会等で幾度となく聞かされてきました中で、社協のあるべき姿として、地域活動の重要性が事ある毎に論議され、又指導も受けて来ました。鈍感な私にもどうやらそのことがわかってきたような気がしております。

◇◇ ではその地域活動に取組むにはどうすればよいのか、又どういう方法が有効であるかが問題です。

私は数年前保護司の研修会に参加したとき、青少年の非行防止や犯罪予防活動は、地域の住民が一体となって行なう地域活動でないとその効果はあがらない。地域活動を効果あらしめるには、「コミュニティー・オーガニゼーション」の方法が有効であるということを教わった記憶があります。

この事は、更生保護の分野だけでなく、特に社協活動にはきわめて大切なことであろうと考えております。

◇◇ このコミュニティー・オーガニゼーションとは、地域社会において、問題や課題についてこれを住民に充分に知らしめ、又理解をさせその問題解決のための活動や運動への参加を動機づけ、具体的な目標と計画をたてて実施する過程といわれています。

◇◇ 本市社協では献血事業の推進を行っておりますが、なかなかその成果があがらず苦慮しております。

そこで本年度は献血推進について方法を次のように改め実施をしてきました。

先ず各行政区毎にそれぞれの公民館に隣組長以上の役員さんに集まってもらい、本市における献血の現状と特に婦人に不合格者がきわめて多く、初めての参加者の場合50％が不合格者であった事実、更にその殆んどが血液の比重不足であった事を知らしめ、丈夫な子を産み育てるべき母親の健康問題、又そのような実態の中で生徒児童、幼児の体力がどのような状態にあるかを訴え、献血に参加することの意義とその利点の認識を深め献血会への入会を促進すると共に各隣組で3～4名の参加者を話し合ってきめてもらい、校区毎に献血を実施することとしました。

又献血会場では食生活改善推進会と協力しパンフレットの配布と共に献血のできる体力づくり運動と、丈夫な子を産み育てる母親運動をむすびつけ、地域において子ども育成会、婦人会、老人クラブ、各種学級など諸グループが連携し、組織的な実践活動を定着すべくすすめているところです。

◇◇ 献血という一つの問題を単に個々の問題とせず、他の問題なり運動と関連させることによって地域活動の組織化を図り継続的な活動として定着させ、より一層の効果を期待するわけです。

経験未熟の小生なるが故に、きわめて初歩的な方策でありますが、更に研修につとめ地域における福祉活動の組織化につとめたいと思っております。

（大野城市社協　安東）

＊＊　＊　＊＊

参加への足がかり

会員制の実施

●法人設立の昭和五十年の暮頃だった。会長（町長）から或る雑談的な場で、会員制の話がなされたが、自主財源問題については、行政べったりの現状では将来が思いやられるので、何等かの方策を樹てねばならないだろうとは考えていた。しかし、法人化したばかりのわが町社協の現況を省みるとき、いかなる形のものにしろ会員制度を採るということは、時期尚早であったし、心ある人々にとっても同じ意見であったに違いない。

●しかし、事実は五十一年度に入ると会員制の方向に向って急速に進んで行った。

たびたびの理事会ではかられ、「会員制度小委員会」ができ、専門に討議・研究され、同七月の評議員会で、全員の賛同を得た。

目標は全戸加入であった。決して無理をしないで、息のながい取り組みをつづけようということであった。しかし、各区におろすと、地域の環境、担当理事の熱意の度合、区長の理解度等々で、実績の面でいろいろの姿が出てきた。まだ、社会福祉協議会に対する理解がなされていないところへ、会員制度がうち出されたので、町民の批判もさまざま。説明会ではきついお叱りを受けたり、社協の趣旨には賛成だが天下り的な会員・会費制には納得いかないという意見が、どの会場でも一、二は出された。

●会員制発表までの、事前の手続き、説明が足りなかったし、各種団体等に対するねまわし等、かんじんなことがらが抜けていたり、反省させられることが多かった。しかし、総体的に見た場合、または、実績（数字の上の結果）を見る限りにおいては、一応成功であったし、町民の社協に対する理解度よりも、社会福祉に対する期待感が、ひしひしと感じられるのであった。従って、社協執行部の住民に対する責任度合いが一層増大したことも事実であり、肝に銘ずべきだと思う。

（二年目をむかえる会員制への反省）

一、普通会員と賛助会員の重複をできるだけさける方策をとる。

二、賛助会員名簿の再検討と整備

三、会費（賛助・特別）の徴収方法

四、社協の趣旨を理解し、進んで参加される方策をたてる。

五、五十一年度加入会員が、増加するか、減るか、定着するか。

社協役職員のやる気と努力にかかっている。

●むすび

われわれ社協関係者が、最も期待し祈るような希いをかけていた普通会員は、住民総参加という社協精神の理想につながるだけに加入実績九十二%は全戸加入に近い素晴しい成績であった。しかしながら、普通会員加入の各区毎の実情はまちまちで、手離しではよろこべないものがある。

社会福祉協議会の趣旨を充分理解し真に、自分達の社協であるという自覚が住民のすべてに浸透する時期はといえば、遠い遠い先のことかもしれない。しかし、少くとも、抵抗を感じることなく、よろこんで加入できるわが町の会員制度に成長させたいと希うのは、あに、一専門員の白昼夢であろうか。

（篠栗町社協　西）

（参考）　昭和51年度　会費収入実績

会員制	会費年額	会員数	金額
普通	一世帯：240円	4,159人	998,160円
賛助	1口 1,000円以上	521	1,120,000
特別	1口 10,000円以上	170	1,892,000
計			4,010,160

共募実績：1,143,616円　（総世帯数　4,527戸）

編集後記

本年四月、専門員連絡会議において改選された新編集委員（松尾、緒方、石上、後藤、田代、田ノ口）によって初めて編集された「まなこ」第七号がやっと皆様の手にとどけられるようになりました。

専門員になって七ケ月、初任者の小生にとって編集委員はちょっと荷が重すぎる感じがしますが、泣きごとばかり言ってはおれません。原稿を読みかえし、誤字を訂正し、字数をかぞえ、レイアウトする。全編集委員が頭をつき合せ、汗をふきふき「こうでもない」「ああでもない」、と話し合う。結局は県社協地域係の皆さんにご迷惑をおかけすることになり、お手をわずらわせることになったようだ。

全般的に見れば、投稿が少い関係もあり決して満足できる「まなこ」ではないが、そのへんは初めての編集でもあり、専門員諸兄にはごかんべんをいただきたいと思います。

最後に、より充実した「まなこ」にする為に、編集員一同、大いに張りきっておりますので皆様のご意見、ご感想や、ビッグニュース等がありましたら、どしどし投稿していただきますようお願いします。暑さ厳しき折柄、専門員諸兄のご健勝をお祈りして後記といたします。

（田ノ口）

■連絡先　福岡市中央区六本松一丁目二番
福岡県社協内まなこ編集委員会